

# 呼掛詞による呼掛について

## 六 城 雅 章

### 一 はじめに

筆者は、前稿<sup>(1)</sup>において「太郎」「花よ。」のような名詞による呼掛の機能および体系について論じた。本稿は、「おい。」「よう。」「さあ。」といった感動詞のうち呼掛を表わす語類（＝呼掛詞）の機能および体系についての考察を中心として、「呼掛」の体系を明らかにしようとするものである。

### 二 感動詞の文法論的規定

一般に、感動詞は、「自立語で活用はせず、主語とならず、修飾語とならず、さらに接続する働きのないもので、感動、呼びかけ、応答などの意を表す単語」というように「すべての観点で消極的に分類され」ている<sup>(2)</sup>が、本稿では、次の二つの文法的特徴を以て、感動詞を規定する。

・それ自体が独立して一つの完全な文となり得る

呼掛詞による呼掛について

・対象の意味を積極的に欠如した態勢においてもち作用的意味に卓越している

感動詞が前者の文法的特徴をもつことは、「ああ。(感動)」「おい。(呼掛)」「はい。(応答)」などの例にも明らかである。また、後者は、森重敏氏が「文としての対象の意味はまったく一般的であり形式的であって、具体的な内実をもたず」「作用的意味としての陳述だけが表面に卓越するということができる」と述べ(森重一九五九)、さらに、大鹿薫久氏が、

少なくとも、これらの語(引用者註・感動詞のこと)にはそれ(引用者註・作用的意味のこと)に対応する対象的な意味が欠如している。しかしそれは対象の意味を予定しての欠如なのであって、ないのではない。なぜなら、どういう形にせよ対象の意味がないというのならば、それはもはや対象的世界とのいかなる連関も持たないのであって、そうならばいわば糸の切れた風ともいうべく、あるいは単なる音声に過ぎないであろう。第一、作用は常に対象に対する作用なのであるから。対象の意味はそれを積極的に欠如した態勢としてこれらの語にあるというべきかも知れない。

(大鹿一九八八)

と述べるところである。そして、かかる文法的特徴をもつものは、感動詞・接続詞・陳述副詞・付属語である。名詞による呼掛のうち「太郎。」や「花よ。」といったものがそうであるように、前者の文法的特徴は感動詞以外にもみられるものであるが、接続詞・陳述副詞・付属語はこの文法的特徴をもたず、したがって、以上の二つの文法的特徴とともに満たすものとして、感動詞を規定することができる<sup>(3)</sup>。

さて、後者、感動詞が対象の意味を積極的に欠如した態勢においてもち作用的意味に卓越していることについて、大鹿氏は、その欠如した対象の意味は「現場によりかか」るかあるいは「それに後行し先行する句の対象の意味(＝

句の対象的事態に対応する」を積極的に取り込む」ことによって補填される、と論じている（大鹿一九八八・一九八九）。感動詞の欠如した対象の意味が現場によりかかることによって補填される場合、感動詞による句は、「おい。」のように、その句のみで対象の意味と作用的意味とを備えた一つの文となるが、他方で、その対象の意味の補填が前後の句の対象の意味を取り込むことによってなされる場合、感動詞による句は、「おい、太郎。」のように、これに相前後する句が在ってはじめて一つの文となる。換言すれば、前者は一句によって一文をなしているのであり、後者は二句によって一文をなしているのである。かかる一句一文性と二句一文性とをともにその構造としてもち得ることが、感動詞による文の特徴である。

そして、感動詞は、その表わす意味（行為としての意味である）の違いから、一般にいわれるように、少なくとも感動・呼掛・応答の三類をその下位分類として設定することができる。本稿では、これら下位分類されたそれぞれの語類を、森重（一九五九）の用語を借りて「感動詞」「呼掛詞」「応答詞」と呼ぶことにし、以下では呼掛詞について考察する<sup>(4)</sup>。

### 三 呼掛詞の機能

呼掛には、「太郎。」「花よ。」のような名詞によるものと、「おい。」「よう。」「さあ。」のような呼掛詞によるものの二つがある。そして、名詞による呼掛と呼掛詞による呼掛との違いは、そのまま名詞と呼掛詞との違いに帰せられる。すなわち、名詞は対象の意味と作用的意味とをともに自らにおいて備えているのに対して呼掛詞は対象の意味を積極的に欠如した態勢においてもち作用的意味に卓越している、という対象の意味の在り方の違いが、名詞による呼掛と呼掛詞による呼掛の違いである。

前稿の内容を整理していえば、名詞による呼掛の機能は、「〈我〉—〈汝〉」の言語場における〈個性〉をもつものとして対象を指定する、すなわち「〈我〉—〈汝〉」の言語場を構成する「機能と」対象を〈個性〉をもつものとして指定する「機能とを合わせもつた、ものである。対して、呼掛詞による呼掛は、呼掛詞という語類がその対象的意味を積極的に欠如した態勢においてもつものであるがゆえに、「指定する」という機能をもたない。また、その対象が指定されない以上、呼掛の対象についての概念である〈個性〉も、ここにはかわらない。したがって、呼掛詞による呼掛は、「対象を〈個性〉をもつものとして指定する」機能をもたず、「〈我〉—〈汝〉」の言語場を構成する」ことのみをその機能とするものと考えられる<sup>(5)</sup>。

改めて以上をまとめるに、名詞による呼掛は、「〈我〉—〈汝〉」の言語場を構成する「機能と」対象を〈個性〉をもつものとして指定する「機能との二つの機能を合わせもつものであり、呼掛詞による呼掛は、「〈我〉—〈汝〉」の言語場を構成する「機能のみをもつものである、ということである。

#### 四 第一種呼掛詞と第二種呼掛詞

現代語の呼掛詞には、次のようなものがある<sup>(6)</sup>。

あの／いざ／おい／おう／さあ／すみません／そら／それ／ちょっと／なあ／ねえ／のう／はい／へい／ほい／ほら／ほれ／もし／やあ／やい／よう

大鹿氏は、呼掛詞を「話し手（主者）が対者を聞き手として言語場に引き入れようとする、そこに成立するもの」と「すでに話し手、聞き手という言語場が成立していてそこで聞き手に注意喚起等呼び掛けるもの」との二種に大別

し、前者の例として「おい」「やあ」「よう」を、後者の例として「さあ」「そら」「ほら」を、それぞれ挙げている（大鹿一九八八）。これを本稿に改訳すれば、前者は「〈我〉—〈汝〉」の言語場を構成する「機能のみをもつ呼掛詞であり、後者は「〈我〉—〈汝〉」の言語場を構成する「機能のうえに、これとは異なる機能が加わった呼掛詞である、といえる。呼掛詞の基本的な機能が「〈我〉—〈汝〉」の言語場を構成する」ことにあると考えられることから、前者は典型的な呼掛詞であり、対する後者は周辺のな呼掛詞であるといえよう。以下本稿では、前者を「第一種呼掛詞」と呼び、後者を「第二種呼掛詞」と呼ぶことにする。先掲の呼掛詞のうち、第一種呼掛詞に属するのは「あの／おい／おう／すみません／ちよつと／なあ／ねえ／のう／もし／やあ／やい／よう」であり、第二種呼掛詞に属するのは「いざ／さあ／そら／それ／はい／へい／ほい／ほら／ほれ」である。

ところで、種々の呼掛詞は、それぞれに独自の用法をもつ。たとえば「おい」には基本的に目上の者が目下の者に対して使用する形式であり目下の者が目上の者に対して使用することはできない、というような待遇的な制限がみられ、また、「おう」や「よう」などの発話者としては男性が想定されやすい、などといった使用者の別が意識される。呼掛詞による呼掛は、「〈我〉—〈汝〉」の言語場を構成するものであるが、「〈我〉—〈汝〉」の関係——言語場における「人」と「人」との対峙——が成立するとき、そこには、上下・親疎・公私といった待遇の分化、また「〈我〉—〈汝〉」としての「人」のもつ年齢・性別といった属性の分化が発生することになる。目上・目下をめぐる制限や想定される使用者の別といった、個々の呼掛詞がもつ独自の用法は、原理的にみて、かかる待遇・属性の分化から生じるものであると考えられる——待遇・属性の分化に由来する呼掛詞の用法の個々についての本稿における言及は、以上に留める。

## 五 第一種呼掛詞

第一種呼掛詞は、「我」―「汝」の言語場を構成する」ことのみをその機能とするものであり、「あの／おい／おう／すみません／ちよつと／なあ／ねえ／のう／もし／やあ／やい／よう」が、これに当る。なお、第一種呼掛詞のうち「あの／おう／すみません／ちよつと／なあ／ねえ／のう／やあ／やい／よう」については、たとえば「やあ」が呼掛詞である一方で出会ひの挨拶でもあるように、一つの形式において呼掛詞と呼掛詞でないものとの両方にわたるという特徴をもつが、これについては、後述する。

## 六 第二種呼掛詞

第二種呼掛詞は、「我」―「汝」の言語場を構成する」機能のうえに、これとは異なる機能が加わつたものであり、「いざ／さあ／そら／それ／はい／へい／ほい／ほら／ほれ」がこれに当る。そして、本稿では、第二種呼掛詞が「我」―「汝」の言語場を構成する」機能のうえに加えもつ機能を、以下に述べるように、大きく三つにわけておく。一つめは、たとえば、キャッチボールをしておりボールを投げ返す際に相手に「そら」「それ」といい、傍で泣いている人にハンカチ差し出す際に「ほら」「ほれ」というような場合である。「そら」「それ」は、「ソ」系の指示詞と関係するものであり、また、「ほら」「ほれ」は、「そら」「それ」とそれぞれ関係をもつ形式ではないかと思われる。そして、第二種呼掛詞である「そら」「それ」「ほら」「ほれ」が「我」―「汝」の言語場を構成する」機能のうえに加えもつ機能として、かかる指示詞との関連に由来する「指示」の機能を挙げることができる。これらに「指示」という機能を認めることについては、たとえば『日本国語大辞典』が「そら」を「それをさし示して、相手に注

意を促すことば」というように「さし示」す機能をもつものと説明していることなどからも、首肯されよう<sup>(7)</sup>。右のボールやハンカチの例においては、まさに、投げられたボールや差し出されたハンカチが「指示」されていると考えられるのである。かかる場面においては、「そら」「それ」「ほら」「ほれ。」は、ふつう、ボールやハンカチが自分の手元を離れる瞬間（ないしはその直前直後）において発せられるものであり、そのボールやハンカチは、まず自分のもとにありそこから相手のもとへと渡らんとするものである。したがって、「ソ」系指示詞が、〈汝〉が〈汝〉領域のモノを指示するものであることを考えれば、かかる例にあつては、自分Ⅱ〈我〉の領域を離れて相手Ⅱ〈汝〉の領域に渡るはずのものとして、ボールやハンカチを「指示」しているのであると考えられる。

また、「はい。」「ほい。」といって相手にハンカチを手渡したり「へい、お待ち。」といって客に商品を手渡したりするように、「はい」「へい」「ほい」は、右の「そら」「それ」「ほら」「ほれ」に通じる機能をもっている。「はい」「へい」「ほい」は指示詞との関連をもたないものであるため、その機能は「指示」そのものではないのであるが、しかし、機能的にみて、「指示」に通じるものであるので、本稿ではこれを「指示」に準じる機能として位置づけておきたい<sup>(8)</sup>。

二つめは、田窪行則・金水敏（一九九七）が「気付かせ・思い出させ」と呼ぶ、「ほら、オリオンが見えるよ。」「ほら、同じクラスに、吉田っていただろう。」「ほら、答が違うよ。よく考えてごらん。」のような場合であり（例文自体はいずれも田窪・金水論文によるものであり、傍線はいずれも引用者によるものである）、田窪・金水論文はこれを「話し手にとってはすでに登録済みの情報を聞き手に気付かせたり思い出させたりする機能を持つ」と分析している。いま、「気付かせ」と「思い出させ」とを本稿にわけて論じれば、前者は、今現在において相手Ⅱ〈汝〉がある情報をそもそももっていない、と自分Ⅱ〈我〉が考え、その情報を相手に伝えるものであり、これに対して、後者は、今現在にお

いて相手がある情報を既にもっているにもかかわらずそれを忘却している、と自分が考え、その情報を相手に伝えるものである、といえよう。

三つめは、「それ、行け。」「ほら、早く問題を解きなさい。」「いざ、行こう。」「さあ、走れ。」のように、相手＝〈汝〉に何らかの行為を促す場合である。以下本稿では、これを「促し」の機能と呼ぶことにする<sup>(9)</sup>。「そら」「ほら」などが、「促し」以外にも、右にみたように「指示」や「気付け・思い出させ」の機能をもつものに対して、「いざ」「さあ」は、「指示」や「気付け・思い出させ」の機能をもたず、「促し」の機能のみをもつものである<sup>(10)</sup>。

さて、先に、第二種呼掛詞の機能としての「指示」について論じた際に触れたように、「はい」は、機能的に、「そら」「それ」「ほら」「ほれ」に通じるところがあるようである。そして、かかる機能上の関連は、「はい、早く問題を解きなさい。」のような例にみられるように、「促し」においても認められるものである。そして、かかる「はい」の機能を、先に、相手に何かを手渡す際の「はい」などを「指示」に準じる機能として位置づけたのと同様に、「促し」に準じる機能として位置づけておきたい。

## 七 呼掛の発話順序

上述のとおり、呼掛は、呼掛詞による呼掛と名詞による呼掛とに大きくわけられ、さらに前者は、第一種呼掛詞と第二種呼掛詞とにわけられる。いま、それぞれの機能を整理して示すと、次のようになる。

- ・ 第一種呼掛詞による呼掛 …… 言語場構成
- ・ 第二種呼掛詞による呼掛 …… 言語場構成 + 指示／気付け・思い出させ／促し



右の整理を踏まえて、本節では、呼掛の発話順序について考察する。

第一種呼掛詞による呼掛と第二種呼掛詞による呼掛とが連続して発話される際には、「おい、ほら。」が自然な発話であるのに対して「ほら、おい。」が不自然な発話となるように、「第一種呼掛詞による呼掛↓第二種呼掛詞による呼掛」という順序で発話されるものである。そして、「ほら、おい。」が不自然な発話となるのは、先行する第二種呼掛詞による呼掛の機能が後行する第一種呼掛詞による呼掛の機能を覆うものであることによると考えられる。つまり、「言語場構成+ $\alpha$ 」の機能をもつ第二種呼掛詞が先に発話されてしまえば、もはや、「言語場構成」の機能しかもたない第一種呼掛詞をこれにつづけて発話する理由がないのであり、それゆえに「第二種呼掛詞による呼掛↓第一種呼掛詞による呼掛」は不自然な発話となるのであると考えられる。

また、第一種呼掛詞による呼掛と名詞による呼掛との発話順序は、「おい、太郎。」が自然な発話であるのに対して「太郎、おい。」が不自然な発話となるように、「第一種呼掛詞による呼掛↓名詞による呼掛」という順序になる。そして、「太郎、おい。」が不自然な発話となるのは、先行する名詞による呼掛の機能が後行する第一種呼掛詞による呼掛の機能を覆うものであることによると考えられる。名詞による呼掛は「言語場構成+ $\alpha$ 」の機能を持ち、これが先行して発話されてしまえば、「言語場構成」の機能しかもたない第一種呼掛詞をこれにつづけて発話する理由がなくなるのであり、それゆえに「名詞による呼掛↓第一種呼掛詞による呼掛」は不自然な発話となるのである。

ところで、第一種呼掛詞のうち「あの／おう／すみません／ちよつと／なあ／ねえ／のう／やあ／やい／よう」は、先に少し触れたように、一つの形式において呼掛詞と呼掛詞以外のものとの両方にわたるといふ特徴をもってい

る。以下、これについて、列記していく。

第一に、「おう」「やあ」「よう」は、「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」のような、いわゆる「出会いの挨拶」としても使用可能である。出会いの挨拶の、その文としての機能は、森重（一九五九）が述べるように「両者が親和し、第一次的に言語場を構成しようとする」ことにある。つまり、出会いの挨拶の機能は「言語場構成＋親和」であると考えられるのである。呼掛詞による呼掛と出会いの挨拶とは、ともに「言語場構成」をその機能として有しているのであり、それゆえに「おう」「やあ」「よう」のように呼掛詞と出会いの挨拶とをわたるものが存在するのであると考えられる<sup>(1)</sup>。

第二に、「なあ」「ねえ」「のう」そして「やあ」「やい」「よう」は、助詞「な」「ね」「の」「や」「よ」の長音化したものでもある。特に、「やあ」「やい」「よう」はヤ行系呼掛詞であり、ヤ行系呼掛詞は、前稿に論じたように、原形的にみて、「花よ」「雪や、こんこ。」のような名詞による呼掛における〈個性〉化形式「よ」「や」となるものである。

第三に、「ちよつと」は、副詞としても使用される。呼掛詞「ちよつと」は、副詞から転成したものであるが、「ちよつと、田中君。」などはもはや副詞とはいいがたく呼掛詞としかいいようのないものである。しかし他方で、現代語においては、副詞としての「ちよつと」も使用される。「田中君、ちよつと。」などは、呼掛詞ではなく副詞であり、「田中君、ちよつといいかな。」などの後部が現象しなかったものである。

第四に、「あの」「あの」「えーと」などと並ぶファイラーの一種としても使用可能である。呼掛詞は、勝義には言語場の構成を行なうものであり、それゆえに、未だ言語場が構成されていない場面において使用することを、その本来とするものである。対してファイラーは、談話を円滑に運ぶために発せられるものであり、したがって、既に言語

場が構成されてある場面における「あつ、それと、あの、例の件についてお話ししたいことがあるのですが。」などは、呼掛詞ではなくファイラーである。

第五に、「すみません」は、謝罪・感謝・依頼の表現としても用いられるものである。「すみません」は、「すみません、借りていた本を汚してしまいました。」といった場合には「ごめんなさい」などと同様の謝罪の表現となり、また「すみません、助かりました。」といった場合には「ありがとう」などと同様の感謝の表現ともなり、そして「すみません、ここにハンコを押してください。」といった場合には「お手数をおかけしますが」などと同様の依頼の表現ともなる。これらの「すみません」は、行為として、「呼掛」ではなく「謝罪」「感謝」「依頼」をしているのであり、したがってこれらは呼掛詞ではないと考えられる。

以上が、第一種呼掛詞にみられる、呼掛詞と呼掛詞以外の形式とのわたりである。呼掛の発話順序に話を戻せば、「あの／おう／すみません／ちよつと／なあ／ねえ／のう／やあ／やい／よう」が呼掛ではなく、出合いの挨拶（「太郎、よう。」）、助詞（「田中君、ねえ。」）、副詞（「はい、ちよつと。」）、ファイラー（「先生、あの……」）、謝罪・感謝・依頼（「社長、すみません。」）として使用された場合には、可能な発話となる。そしてこれは、後行する諸形式がそもそも第一種呼掛詞による呼掛ではないために、その機能が先行する呼掛の機能に覆われる、という態勢をとらないからであると考えられる。

そして、第二種呼掛詞による呼掛と名詞による呼掛との発話順序については、「ほら、太郎。」「太郎、ほら。」のいずれもが自然な発話となるように、「第二種呼掛詞による呼掛↓名詞による呼掛」という順序と「名詞による呼掛↓第二種呼掛詞による呼掛」という順序との両方が可能となる。第二種呼掛詞による呼掛と名詞による呼掛とは、ともに「言語場構成」をその機能としてもつものであるが、さらにそのうえに、前者は「指示／気付けせ・思ひ出させ／

促し」の機能を、後者は「個性」をもつものとしての対象の指定」の機能を、それぞれ加えてもっている。したがって、第二種呼掛詞による呼掛と名詞による呼掛とは、いずれが先行し後行して発話された場合においても、先の、第一種呼掛詞による呼掛と第二種呼掛詞による呼掛との場合や第一種呼掛詞による呼掛と名詞による呼掛との場合にみられた、先行する呼掛の機能が後行する呼掛の機能を覆う、という態勢をとらないのであり、それゆえに、いずれが先行し後行してもよいのであると考えられる。

さらに、三種の呼掛（第一種呼掛詞による呼掛／第二種呼掛詞による呼掛／名詞による呼掛）が連続する場合を考えると、「おい、ほら、太郎。」のような「第一種呼掛詞による呼掛↓第二種呼掛詞による呼掛↓名詞による呼掛」の場合および「おい、太郎、ほら。」のような「第一種呼掛詞による呼掛↓名詞による呼掛↓第二種呼掛詞による呼掛」の場合にのみ可能な発話となるが、これについても、既述の、機能の被覆の観点から、同様に説明することができる。

以上より、「呼掛」（第一種呼掛詞による呼掛／第二種呼掛詞による呼掛／名詞による呼掛）の発話順序には、先行する呼掛の機能が後行する呼掛の機能を覆うという態勢をとる場合には不自然な発話となり、かかる態勢をとらない場合には自然な発話となる、という規則の存することが明らかとなった<sup>42)</sup>。

なお、呼掛の連続的な発話ということであれば、呼掛には「おいおいおい。」「ほらほらほら。」「太郎太郎太郎。」のように、切迫した場面において同一の形式を何度も反復して発話するということがあるが、かかる反復的な発話は、「見て見て見て。」「危ない危ない危ない。」「車車車。（こちらに向かって走ってくる車の存在を相手に伝える文）」のように、切迫した場面における発話として呼掛以外においても多く観察されるものであることから、呼掛の内部の問題ではなく、切迫した場面における我々の言語行動一般の問題であると考えられる。

## 八 ま と め

「呼掛」は、大きく、名詞による呼掛と呼掛詞による呼掛とにわけられる。前者は、「我」―「汝」の言語場を構成する「機能」と「個性」をもつものとして対象を指定する「機能」とを合わせもった、すなわち「我」―「汝」の言語場における「個性」をもつものとして対象を指定する」ことをその機能とするものである。後者は、「それ自体が独立して一つの完全な文となり得る」「対象的意味を積極的に欠如した態勢においてもち作用的意味に卓越している」という文法的特徴を以て規定される語類によるものであり、「我」―「汝」の言語場を構成する」ことを、その本来的な機能とするものである。そして、呼掛詞は、「我」―「汝」の言語場を構成する「機能のみをもつ、典型的な呼掛詞としての第一種呼掛詞と、「我」―「汝」の言語場を構成する」機能のうえにこれとは異なる機能（指示／気付け・思い出させ／促し）が加わった、周辺のな呼掛詞としての第二種呼掛詞とにわけられる。

また、「呼掛」（第一種呼掛詞による呼掛／第二種呼掛詞による呼掛／名詞による呼掛）の発話順序には、先行する呼掛の機能が後行する呼掛の機能を覆うという態勢をとる場合には不自然な発話となり、かかる態勢をとらない場合には自然な発話となる、という規則が存する。

以上、本稿では、呼掛詞による呼掛の考察を中心として、「呼掛」の体系について論じた。今後は、呼掛詞以外の広義感動詞についても、分析を進めていきたい。

註(1) 六城雅章（二〇一五）。以下同様。

(2) 佐藤琢三（二〇一四）。

- (3) たとえば、森山卓郎（一九九六）の「独立性」と「辞」性」とによる感動詞把握は、本稿と同様の立場に立つものである。なお、感動詞がかかる文法的特点をもつこと自体は、時枝誠記（一九五〇）などにも指摘されている。
- (4) ただし、区別のため、以下本稿では、感動詞・呼掛詞・応答詞などを総合する概念としての「感動詞」に言及する際にはこれを「広義感動詞」と呼び、広義感動詞の下位類としての「感動詞」について言及する際にはこれを「狭義感動詞」と呼ぶ。なお、広義感動詞の下位類は、狭義感動詞・呼掛詞・応答詞の三つに尽きるものではないことを断わっておく。
- (5) 前稿に「呼掛詞一般は、まさしく〈我〉―〈汝〉の言語場を構成することに特化した形式なのである」と予告的に述べておいた。なお、かかる分析は、結果的にいえば、仁田義雄（一九九七）による「呼びかけ詞による呼びかけは、呼びかけられた存在の注意を引くことによって、相手を言語行為の対手に据えるものである。そして、そのことによって、そこに言語行為の場が準備され開かれることになる」という分析に一致するものである。
- (6) 本稿における呼掛詞の掲出は、そのヴァリエーションをも総合するものとして行なう。すなわち、本稿が呼掛詞としてたとえば「おい」「もし」などと記すとき、それは「おい」「おいおい」「おおい」や「もし」「もしもし」といった変異をも含み込んでいるということである。それぞれの変異形はそれぞれに独自の用法やニュアンスをもつが、それは、本稿の論述においては問題とならない。
- (7) ちなみに、同辞典において、第二種呼掛詞としての「それ」は「相手に指示し、注意を促すために発する語」と、「ほら」は「何かをさし示して、相手の注意をうながすときに発する語」と、「ほれ」は「ほら」に同じ」と、それぞれ説明されている。
- (8) なお、指示詞との関連をもち、相手へのはたらきかけを表わす広義感動詞として、「こら」「これ」がある。名詞によるものであれ呼掛詞によるものであれ、呼掛にかかわる指示詞は、ファイラーとしても使用可能な「あの」（後述）を除いて、呼掛が「我」―「汝」の構造を有することから「ソ」系であるが、対して、「こら」「これ」が関連をもつのは「コ」系である。また、特に「こら」については「いばって人をとがめたり、怒って他人に注意する時に発する語」（『日本国語大辞典』）などと記述されることが多く、これは「呼掛」ではなく、威張り、咎め、怒り、注意することの表現であると考えられる。以上から、本稿では、「こら」「これ」を呼掛詞ではないものと考え、相手に何かを手渡す場合における「ほら」と「はい」との相違については、大島弘子（二〇〇一）に論がある。

- (9) 森山卓郎・張敬茹(二〇〇二)のように、「いざ」「さあ」「そら」「それ」など——本稿にいう「促し」の機能をもつものを呼掛詞とは区別する論もあるが、本稿は、これらを呼掛詞の一種であると考えたものである。
- (10) 「そら」「それ」「ほら」「ほれ」は「ソ」系指示詞と関連をもつものであるが、「さあ」の「サ」も、元来「ソ」と並ぶ指示詞である。
- (11) 出会いの挨拶にかんする本稿における分析は、その機能が「言語場構成+親和」であること、これが確認されれば、ひتماずよい。
- (12) 不自然であると述べた「ほら、おい。」「太郎、おい。」のような発話について、註釈しておく。これらが不自然な発話となるのは、述べてきたように、先行する呼掛の機能が後行する呼掛の機能を覆うという態勢をとるからであった。ゆえに、「ほら」と発話したにもかかわらず、相手がこれに気づかなかつたりあるいは相手がこれを無視したりした場合、つまりは先行する呼掛「ほら」の発話が無効となり「言語場構成」が実現されなかつた場合においては、これにつづけて「おい」と発話したとしても機能の被覆が発生せず、可能な発話となる。「太郎、おい。」の場合も、同じく、先行する「太郎」という呼掛が無効化された場合には、これにつづけて「おい」と発話することができる。三種の呼掛が連続する場合においても、同様に考えられる。

#### 参考文献

- 大鹿薫久(一九八八)「感動文の構造——句と文についての把握——」『ことばとことのは』五・和泉書院
- 大鹿薫久(一九八九)「感動文の構造(承前)——句と文についての把握——」『ことばとことのは』六・和泉書院
- 大島弘子(二〇〇一)「ほら」の機能について『日本語教育』一〇八・日本語教育学会
- 佐藤琢三(二〇一四)「感嘆詞」『日本語大事典』朝倉書店
- 田窪行則・金水敏(一九九七)「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版
- 時枝誠記(一九五〇)『日本文法 口語篇』岩波全書
- 仁田義雄(一九九七)「未展開文をめぐる」(川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房 所収)
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(二〇〇〇—二〇〇二)『日本国語大辞典 第二版』小学館

森重敏（一九五九）『日本文法通論』風間書房

森山卓郎（一九九六）「情動的感動詞考」『語文』六五・大阪大学

森山卓郎・張敬茹（二〇〇二）「動作発動の感動詞「さあ」「それ」をめぐって——日中対照的観点も含めて——」『日本語文法』

二一二・日本語文法学会

六城雅章（二〇一五）「名詞による呼掛について——喚体論の視点から——」『日本文藝研究』六七—一・関西学院大学

# 付記

本稿は、筆者の修士論文「呼掛の文法論的研究」（関西学院大学・二〇一六年一月提出）の一部に加筆・修正を施したものである。

（ろくじょう つねあき・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程）